

しんまちまえいせき
新町前遺跡（第1次）概報

峡南地域単位制・総合制高校建設事業に伴う発掘調査



2021.3

山梨県教育委員会

山梨県観光文化部

○序文

本書は、平成30(2018)年度に山梨県埋蔵文化財センターが実施した峠南地域単位制・総合制高校建設事業に伴う発掘調査の概要を報告するものです。

発掘調査では、平安時代の集落跡や、中世後半頃の水田跡と畑跡が見つかりました。平安時代の集落跡では、50軒の堅穴建物跡をはじめ、集落の中心を流れる川跡1条、墓と思われる配石遺構などが見つかっており、峠南地域における平安時代集落の一端を初めて垣間見ることができます。堅穴建物跡の中には、鍛冶炉と思われる壁面が焼けた土坑を持つものがあり、調査区のいたるところで輔羽口や鍛冶滓などが出土していることから集落内で活発に鍛冶が行われていたと考えられ、当地域の活動のようすが明らかになりました。また、中世後半頃の水田跡では、石積み護岸を持つ用水路が水田に水を供給する状況が見つかり、当時の農業土木技術を目の当たりにすることとなりました。この水田跡には、河川氾濫による被災痕が残っており、水田跡の廃絶状況まで見ることができます。

新町前遺跡が所在する市川三郷町市川大門地域の低地地域は、新町前遺跡が見つかるまでは遺跡の空閑地として、その土地利用の歴史は無いものと考えられていました。それは、地表面付近に厚く堆積した砂礫層による先入観から地元住民をはじめ誰しもが考えていたことです。ところが、遺跡が砂礫層によりパックされて良好な状態で保存されている状況が今回の調査を通して明らかとなり、今後の市川大門地域の歴史を紐解く重要なカギとなっていくと考えられます。この新町前遺跡の発掘調査成果が、地域の歴史研究を考える機運への起爆剤となることを願っております。

2021年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 佐久間浩之

○目次

1. 調査の経過
2. 遺跡の周辺環境
3. 発見した遺構と遺物
4. まとめ

○例言

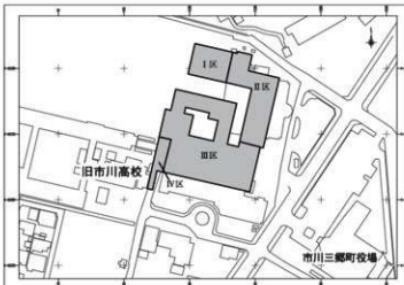
1. 本書は平成30(2018)年度に実施した山梨県西八代都市川三郷町市川大門に所在する新町前遺跡(しんまちまえいせき)の発掘調査の概要報告である。
2. 調査は峠南地域単位制・総合制高校(現 青洲高校)建設工事に伴って、山梨県教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。なお、山梨県埋蔵文化財センターは令和2(2020)年度から、山梨県教育委員会から山梨県観光文化部に移管されている。
3. 本書の執筆・編集は御山亮済が担当した。
4. 本書に関わる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

1. 調査の経過

新町前遺跡は、峠南地域単位制・総合制高校（現 青洲高校）建設に先立ち平成 29 年度に実施した試掘調査により新たに発見された遺跡である。施工に当たり本校舎の基礎杭を打ち込むことから、遺跡保護のために記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなり、平成 30 年度に建設予定地の約 5,700m²の範囲を 2 面の遺構面を対象として発掘調査を実施した。

発掘調査は平成 30 年 4 月 26 日から平成 31 年 2 月 4 日までの期間で実施したが、事業用地内に既設の市川三郷町民体育館及び同町民会館の解体作業と並行して実施したため、I～IV 区に分けて順次着手し、各区の調査及び埋め戻しを実施した。各区の区割りは、旧市川高校グラウンドを事業用地とする北側の調査区を I 区（約 600m²）、旧町民体育館跡地と旧市川高校グラウンド南側を事業用地とする調査区を II 区（約 1,300 m²）、旧町民会館跡地を事業用地とする調査区を III 区（約 3,500 m²）、旧市川高校グラウンドへ続く舗装道路を事業用地とする調査区を IV 区（約 300m²）とした。

調査期間は、I 区を 4 月 26 日から 10 月 5 日までに埋め戻しを行い、II 区は 7 月 11 日に、III 区は 9 月 19 日にそれぞれ着手して、両区を一括して 12 月 25 日までに埋め戻した。IV 区は 1 月 10 日に着手して 2 月 4 日までに埋め戻し、新町前遺跡第 1 次調査の全調査工程を終了した。



第 1 図 新町前遺跡（第 1 次）調査区割り

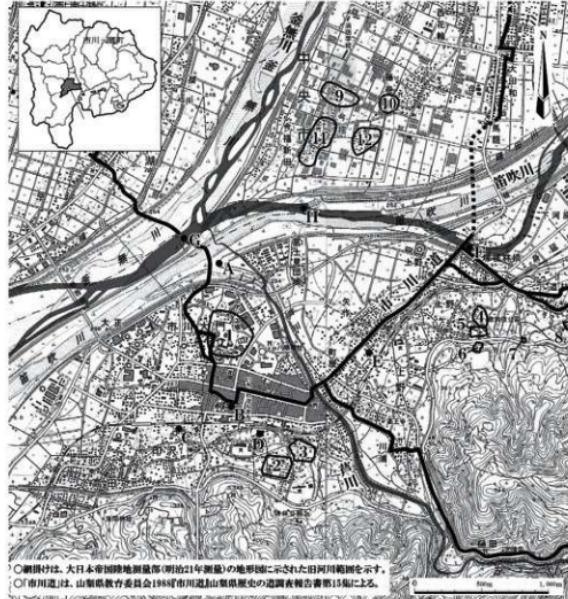


新町前遺跡（第 1 次）遠景（旧市川高校を望む）

2. 遺跡の周辺環境

新町前遺跡は西八代都市川三郷市市川大門に位置し、標高約246mの場所にある。市川大門地域は御坂山地を発する芦川により形成された扇状地に該当し、扇状地中央を北流する芦川左岸に展開している。明治時代の地形図によると、芦川と笛吹川と釜無川の三河川が市川大門地域の北側で合流しており、芦川の下流域である低地地域は洪水や河川氾濫などの災害が多発した地域である。したがって、既知の遺跡は扇状地の縁辺部にある台地上に位置しており、繩文時代~古墳時代の集落跡が主に分布している。また、エモン塚古墳や上野古墳群といった古墳も同様に比較的標高が高い台地上に分布する。古代以降も、甲斐国の大天守閣として知られる平塙寺や延喜式内社の弓削神社といった拠点的施設が台地上に展開する傾向にある。近世には、甲斐国の中西部の支配拠点として設置された市川陣屋が扇状地の扇尖部に展開する市川大門村に設置されるが、当該範囲は、国土地理院の治水地形分類図によると村全体が自然堤防上に収まり、芦川の扇尖部でも河川氾濫の危険性が少ない地域を選んでいると考えられる。

新町前遺跡の周辺では、現時点で把握されている遺跡は皆無である。從前には、扇状地扇尖~扇端部に遺跡が無いとされていた。それは、掘削するとすぐに円礫を含む砂礫層が厚く堆積している氾濫原という認識（先入観）から、遺跡の空閑地とされてきたからである。しかし、新町前遺跡の発見により、厚く堆積した砂礫層の下に遺跡が良好な状態でパックされている可能性が示唆されたため、今後の積極的な遺跡分布の把握が待たれる。



番号	遺跡名	時代	種別	備考	番号	史跡等名称
1	新町前遺跡	平安・中世	集落跡		A	神切跡地及び青井田
2	御厨敷造跡	奈良~中世	城郭跡	市川二郷町教委・山文研2016	B	市川陣屋
3	平塙前跡	平安・中世	城郭跡	新南相模湖の地図本地	C	弓削神社
4	上野古墳群	古墳			D	宝嚴院
5	一条氏御前遺跡	繩文~中世	集落跡	三郷町教委1988, 1991, 1993	E	夷門神社
6	上野遺跡	繩文~古墳・中世	集落跡	三郷町教委1989	F	大星忍水跡武造神 代官中井清太先生祠
7	一城池遺跡	弥生	集落跡		G	坪切の渡し
8	エモン塚古墳	古墳			H	茶の渡し
9	今振村東遺跡	近世	散在地			
10	延里遺跡	近世	散在地			
11	中道下遺跡	近世	散在地			
12	芦村遺跡	近世	散在地			

(1) 教委・・・ 教育委員会
山文研・・・ (公財)山梨文化財研究所

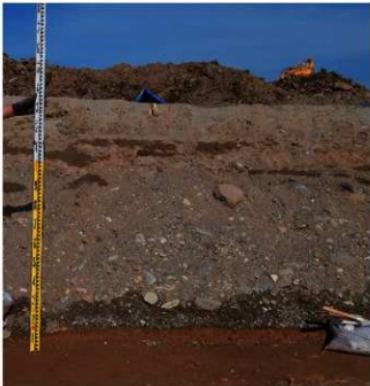
第2図 新町前遺跡の位置と周辺の遺跡

3. 発見した遺構と遺物

【確認した生活面と時代】 発掘調査では、平安時代後期～中世後半までの文化面を2面調査した。今回の調査区では、表土直下で径約10～20cmの花こう岩を中心とする円礫を含む砂礫層が厚く堆積する。巨視的にみると、砂礫層は芦川の現流路に近い調査区の北東ほど厚い傾向があり、南西に向かうにしたがって薄くなっている。調査区Ⅳ区では、砂礫層の堆積自体がみられなくなる。当該砂礫層については、既存建物基礎による攪乱により明確に観察することができなかつたが、粒径の異なる砂礫層の切り合いが認められ、少なくとも2回以上の河川氾濫により堆積したものと考えられる。この砂礫層を除去すると、中世後半の水田跡が表れる。この文化層を第1面とした。

第1面では、畦畔で区画された15枚の水田面と水田に水を供給するための用水路を確認した。水田作土層中からは、15世紀頃のカワラケや陶器、青白磁、古銭が出土している。原位置を留めていることが明らかなる遺物は無いが、下層包含層中の出土遺物との連続性を鑑み、水田の経営時期をおよそ当該期とした。水田面には、南東方面から放射状に延びる氾濫流路が認められる。この氾濫流路は水田面を抉りながら北流し、用水路を大きく破壊しており、相当激しい災害であったことが窺える。第1面の水田面はこの厚い砂礫層にパックされた状態であったため、復旧作業を行わずに土地利用自体を放棄したものと考えられる。

第1層を50cm程度掘り下げると、平安時代後期～末及び中世前半にかけての集落跡を確認した。平安時代の集落跡は堅穴建物を主体とする建物群により構成されており、発掘調査では50軒の建物跡を確認した。堅穴建物跡は、地山を構成する褐色細粒砂層上に構築されている。この褐色細粒砂層は遺跡形成期以前の河川堆積により堆積したものであり、部分的に氾濫流路と思われる礫層が筋状に広がる土地である。数軒の堅穴建物跡は、この礫層上に建物を建築している。この褐色細粒砂層上には黒褐色シルト層が調査区全域に堆積している。この黒褐色シルト層を掘り込んで、中世前半の遺構が形成されている当該期の遺構として確認できたものとして、2間×5間もしくは並列する2棟の2間×2間の掘立柱建物跡とその北側に分布する土坑群のみである。



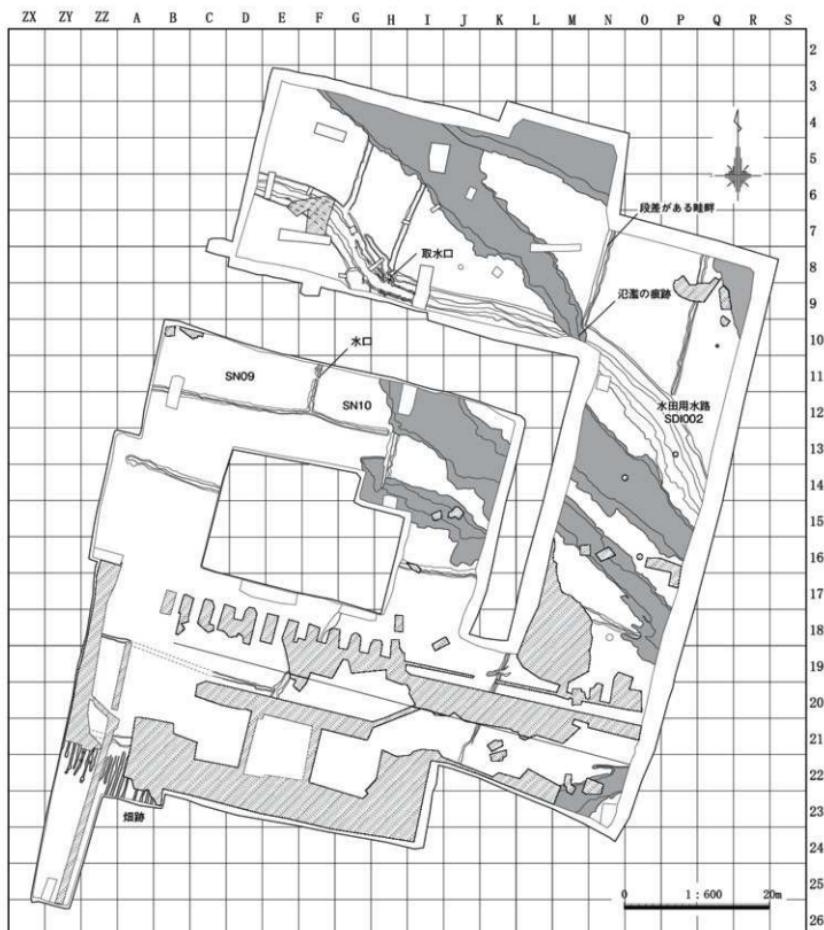
厚く堆積した砂礫層（Ⅱ区東壁）



遺構掘削作業風景

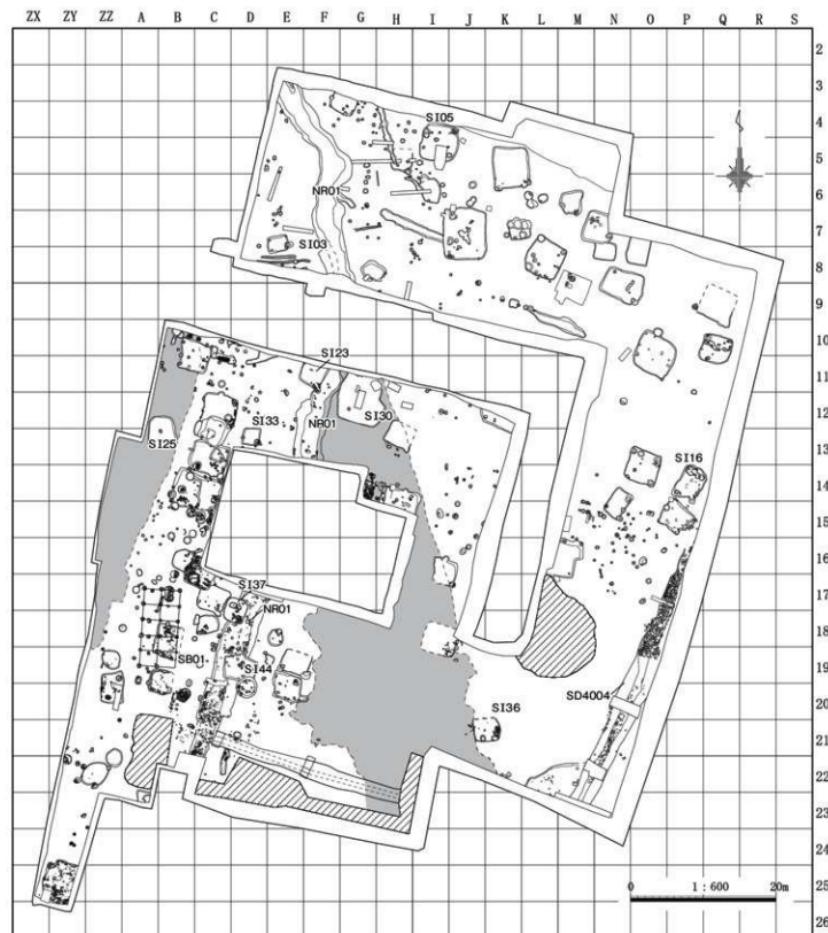


測量作業風景



第3図 第1面構造配置図

網かけ…沿道流路
斜線…カララン



第4図 第2面遺構配置図

網かけ…氾濫道路
斜線…カララン

【第1面の調査成果 概要】中世後半頃の水田と薪跡を検出した。水田には、調査区北部において調査区南東方面より西流する用水路 SD1002 が整備されている。水田の作土層は、表面の水はけは良いが水を含むと粘性が高くなる褐色のシルトにより構成されており、礫の混入はほとんど認められない。作土層中には 15 世紀代を主体とする遺物を少量含む。出土遺物にはカワラケ、陶器、青白磁（碗、皿、壺類）、古銭、馬齒などが認められるが、いずれも破片資料である。遺物を含む作土層の来歴は明らかではないが、同一層が調査区一帯で広範囲に認められることから、当該地にあった中世後半頃の文化層を改変して水田とした可能性も視野に入れて検討すべきであり、その場合、水田の営農時期はさらに下る可能性もある。

【水利の構造】次に水供給システムに着目する。I ~ II 区に渡り東西方向に用水路 SD1002 を検出した。水路幅約 1.5 m、深さ約 0.5 m の規模を呈する。基本構造は、護岸を盛土により構築しており、骨材に人頭大の円礫を組み込む。同様の構造は、甲府市東河原遺跡の近世に帰属する水田においてもみられる。H-8 区付近には取水口が設けられており、その東 3.5 m 以上、西 2 m の間では、護岸に 2 段の石積みが構築される。栗石は無く石積みを盛土で押さえている。II 区以東では石積みが確認できないことから、取水口付近に限定して設置された石積み護岸か、もしくは、蛇行して変化する水流への対処のための構造かもしれない。SD1002 の断面を観察すると、取水口付近では 2 回の作り替えが認められる。このことは、水田 経営が長期間継続していたことを示唆しているとともに、水流により崩れやすい箇所であったと考えられる。

水供給について概観すると、SN01-02 間や SN09-11 間の畦間に水口が設置されている。一定の単位で用水路から取水し、その水を自然流下して、水田内に水を張り巡らせる方法で水田に水を供給する方法がとられている。



石積み護岸の用水路 SD1002 (I 区部分 東から望む)



第5図 SD1002 断面図 (取水口付近) 施尺任意



石積み護岸に付属する取水口



水口 (水田 SN09-10 間畦畔)

【水田の区画整備】全体的な景観を見ると、水田を区画する畦畔は直線的なものに限られており、主軸は基本的に約15°東偏している。現地表の水田や建物、道路または隣接している旧市川高校の建物軸はこの軸に似ていることから、当地域の条里型の地割は、この水田の成立期（13～15世紀か）までには施工され、現代までその地割を踏襲しているものと想定する。

次に水田の区画形状を概観する。区画の形状に規格性は認められないが、大きく2つの傾向が認められる。1つはSD1002以北には南北方向に長い区画で、もう1つはSD1002以南にみられる一辺20m以上の規模をもつ比較的大面積の区画である。南北方向に長い区画に着目しSN01-05間、SN01-02間の畦畔を見てみると、それぞれ約40、30cmの段差が設けられた棚田状の区画であることがわかる。これは東高西低の基本地形に対して水田耕作に適した平坦面を作り出すために、畦畔に段差を設けて傾斜を解消しているものと考えられる。一方でSD1002以南では畦畔に段差を設けるものは無く、比較的平坦な土地である。したがって当該地の微地形では、概ねSD1002を境に北側は東西方向の傾斜が比較的急であったことを示唆している。整然とならぶ区画に対し蛇行する用水路の離隔は、条里型地割と地形の2つの素因に抑制された土地利用の現れであろう。



段差がある畦畔（水田 SN05-01間）



氾濫の痕跡（骨材の礫が露出している）



氾濫の痕跡②（深く抉られた水田の様子）

【水田を襲った氾濫の痕跡】第1面の広範囲で検出した水田面では、水田表面に氾濫による被災跡が残っている。氾濫流路は調査区の南東方面から北西方面に放射状に延びる。特にSD1002を破壊した流路は被害が大きく、骨材の礫が露出するほど水田面を深く抉っている。当該地點においては、SD1002の南岸が調査区外となっているが、壁面に見える砂礫層の堆積状況から、SD1002内を流下する水流によるものではなく、SD1002を横断する水流により破壊されたものと考えられる。一方で、調査区南東部に当たるM・N-22・23区では、軸を変えて北東方面から南西方面に向かう氾濫流路の一部が認められる。したがって、異なる軸の氾濫流路の延長線が交差する、市川三郷町役場と調査区の間くらいに氾濫の発生源が求められるだろうか。

この河川氾濫により、水田面の広大な範囲に分厚く砂礫層が堆積し、水田経営は復旧作業などをを行うことなく廃絶したものと考えられる。調査区壁面の堆積状況をみると、この時期を境に少なくとも近世～近代までは陸地化することなく、砂礫が運搬されるような環境となり、氾濫原の時期が長期間続くようである。

【第2面の調査成果 概要】水田床土の下約50cmでは、褐色砂層がみられ、当層を確認面として平安時代～中世前半の集落跡が見つかった。検出した遺構は、竪穴建物跡50軒、掘立柱建物跡1棟、土坑300基以上、ピット300基以上、自然流路1条、大溝1条、溝12条がある。全体的な遺構分布を概観する。調査区中央では南北方向に伸びる自然流路NR01を検出した。集落跡の竪穴建物跡は自然流路NR01の周辺に集中して分布する傾向があるが、NR01の埋没後にNR01の埋土を掘り込んで竪穴建物を作るものもある。集落の後半期には、集落の周囲に幅約4m、深さ約2mの大溝が掘り込まれる。集落を区画するためのものとも考えられるが、集落廃絶後に生産域へと土地利用が変化する状況から、地下水位の上昇のような居住環境の変化に対して、居住域の水位を下降させる狙いがあった可能性も指摘されている(後述)。

【集落の構成～竪穴建物跡～】

(1) 竪穴建物跡 SI03

竪穴建物跡SI03は、E-7・8区に位置し、南北2.15m×東西2.85mの隅丸長方形の平面プランを呈している。壁高は残存約0.35mあり、貼り床は建物の中央に近いところで部分的に確認できたが顕著ではない。建物の四隅のうち、南東を除く3か所に柱穴が認められる。建物プランに比べて上端は不整形であり、埋没過程において壁面が崩落して皿形の断面形を呈する。カマドは東壁南寄りに作られて袖石は両側とも残存するが、天井石は焚口部分に崩落している。



竪穴建物跡 SI03 完掘状況

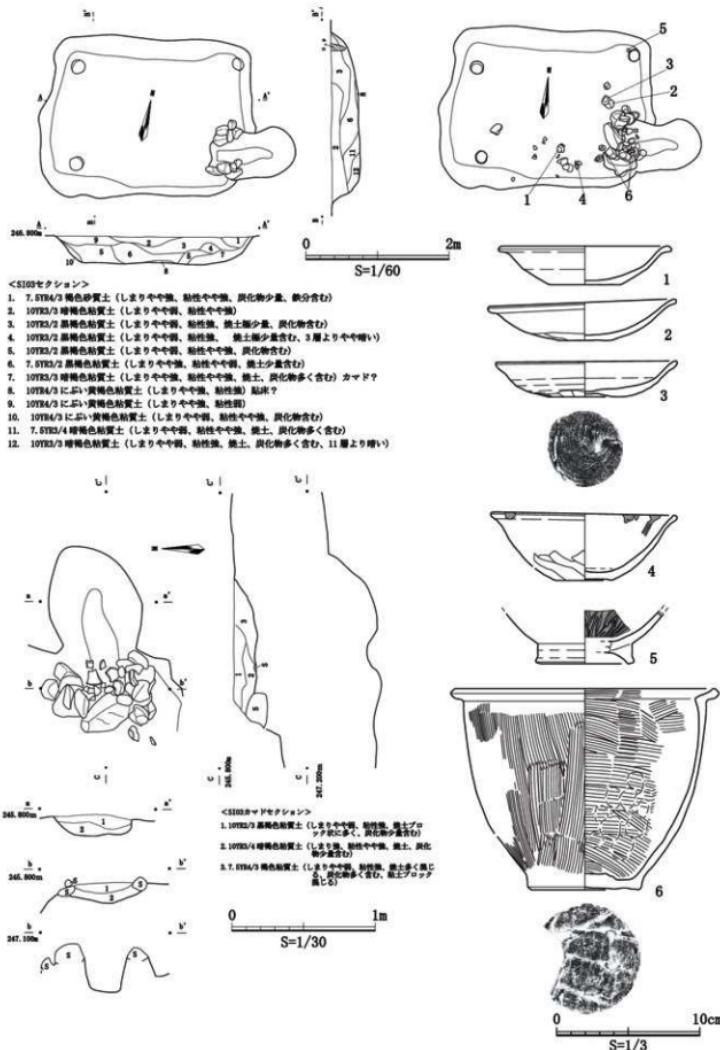
出土遺物について概観する。遺物の出土はカマド周辺に集中している。遺物組成では、土師器壺、皿、小型甕、須恵器壺、灰釉陶器碗がある。1～3は土師器皿、口径は11.6～12.8cm、器高は2.6～2.7cm、底径は3.8～5.1cm。2、3は体部下半をヘラケズリにより成形する。1、2は底部から体部にかけてやや直線的に立ち上がり、口縁部はやや玉縁状を呈する。3は底部から体部にかけて内窓にして立ち上がる。底部は肥厚しており、1、2とは異なる器形である。2、3はカマド付近から出土した。2は逆位、3は正位の状態で、背中合わせで出土した。4は土師器壺。口径12.6cm、器高4.7cm、底径3.9cm。底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部はやや玉縁状を呈する。体部下半は斜行ヘラケズリにより成形する。口縁部に筋状に煤が付着していることから、灯明皿として使用したものであろう。5はSI03南東隅の柱穴付近から出土した。器高3.8cm以上、底径6.3cmの高台を持つ碗である。内面は黒色処理がされ、放射方向のミガキがみられる。見込み部から体部はやや直線的に立ち上がる。6は小型甕。口径18.0cm、器高14.1cm、底径7.5cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ、指頭圧痕がみられる。出土土器は甲斐型VI期に比定され、新町前遺跡で最古段階(集落形成期)の竪穴建物跡とみられる。



SI03 遺物出土状況（建物南東隅）



SI03 カマド遺物出土状況



第6図 SI03平面図、遺物分布図、カマド平面図、出土土器

(2) 壁穴建物跡 SI05

SI05はF・G-3・4区に位置し、南北2.3m以上×東西3.5mの隅丸方形の平面プランを呈している。主軸は東へ約24°振れている。壁穴建物跡の北およそ20%は調査区北辺の外にある。壁高は残存約0.5mある。明らかにSI05に伴う柱穴と断定できるものは見当たらないが、プラン外周にはピットが多い。埋土中では、遺物の出土が床面付近と上層1・2層に集中する。遺物の型式に大きな差異は認められないが、上層の遺物は埋没過程で窪地になっているところに投棄されたものもある。

床面には土師器壺を主体とする残存度の高い遺物が数多く散在している。カマドは建物跡の南東隅に設けられており、構築材の礫が見当たらないことや埋土下層においてカマド構築材の可能性がある黄褐色ブロックが混在していることから、建物の使用停止時にカマドの破壊行為、構築材の撤去を行い、その後、(建物内で宴會を行って)廃絶したものと推察する。

次に出土遺物について概観する。1～11は土師器壺。寸法により3つに細分することができる。1～4は口径10.6cm～11.2cm、器高3.8～4.0cm、底径5.8～6.2cmの小型の壺。5～8は口径11.4～11.8cm、器高3.4～3.8cm、底径4.6～6.2cmの口径に比べて器高が高い皿形の壺。9～11は口径12.2～12.6cm、器高4.6cm、底径6.0～6.8cmの大型の壺である。小型壺と大型壺については、部から口縁部にかけてやや外溝して立ち上がる傾向が認められるが、皿形の壺については内溝するものもみられる。小型の壺の体部は他の区分に比べてやや厚い。また、各区部とも焼成不良であり器質は軟らかく、やや粗製の感がある。12は土師器片口。口径19.0cm、器高9.0cm、底径8.5cm。口縁部に幅4.0cmの注口が付く。建物跡西壁周辺から出土した。13は灰釉陶器碗。口径13.4cm、器高6.0cm、底径6.6cm。灰釉は漬掛けによる施釉。高台は体部下半の回転ヘラケズリのうえ貼り付ける。口縁端部はやや外反して、内面口唇部に沈線が1条巡る。東山72号窯式。14は土師器甕。口径29.2cm、器高10.8cm以上。内面はヨコハケ、外面はタテハケにより調整されている。体部表面には10か所以上の種実圧痕がみられる。出土土器は甲斐型Ⅷ期に比定される。



SI05 遺物出土状況（全景）



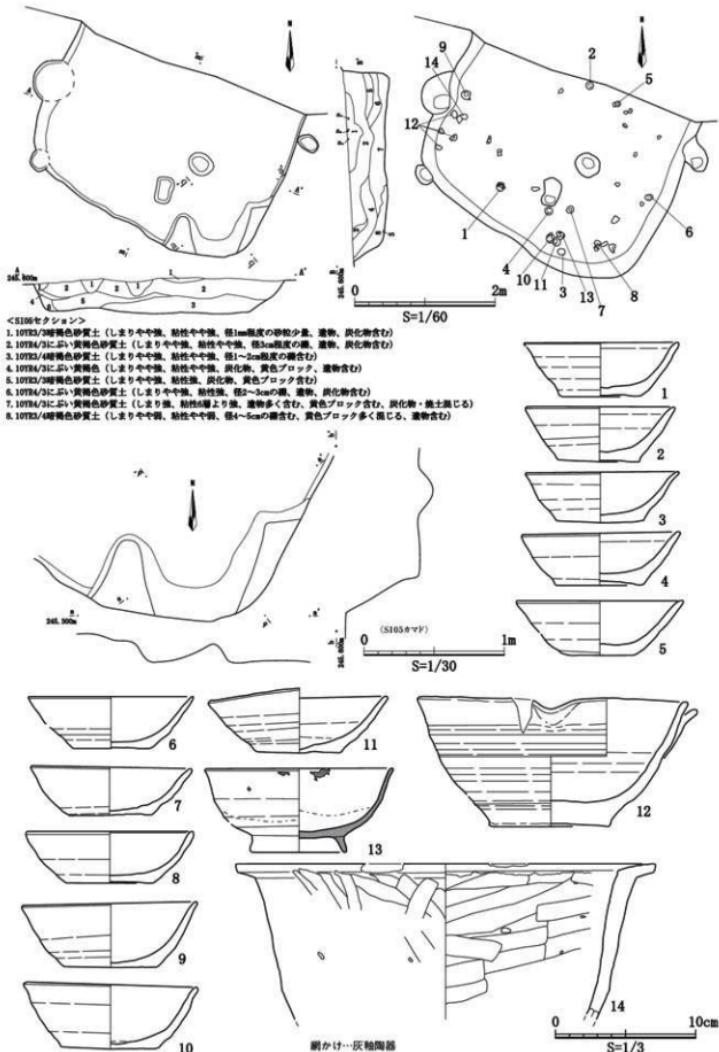
SI05 カマド周辺遺物出土状況



SI05 遺物出土状況



SI05 片口出土状況



第7図 SI05 平面図、遺物分布図、カマド平面図、出土土器

(3) 壑穴建物跡 SI16

壧穴建物跡 SI16 は、P-14 区に位置し、南北 4.8 m × 東西 3.3 m の不整長方形を呈している。主軸は東へ約 30° 振れている。壁高は残存約 20cm ある。カマドは建物の南東隅に設けられており、袖石が 3 石ほど立ち上がって残存している。天井石や他の袖石は原位置を留めておらず、東壁付近に散在している。

床面に焼土と炭化材が北側を中心に散在している状況から、焼失した壧穴建物跡とわかる。カマド東側の壁面の被熱が特に激しく、壁面が焼土化している。このことから、出火元はカマドの可能性がある。床面の炭化材の樹種は、クヌギ節が主体であり多くは建築材として利用されたものであろう。カマド構築材の礫が北側に飛散しているようすや、炭化材や焼土が建物北側に集中する状況から、北側に向かって倒壠したと想定される。

出土遺物を概観する。遺物分布は、1 個体の破片が建物跡内に広く飛び散っている状況がある(2・4)。倒壠時の衝撃によるものかもしれない。1 は土師器壺。2~3 は灰釉陶器碗。4 は土師器甕。外面をヨコハケのちタテハケにより成形している。ハケの方向はやや乱雑である。出土土器は甲斐型Ⅲ期に比定される。

(4) 壑穴建物跡 SI33

壧穴建物跡 SI33 は、D-13 区に位置し、南北 2.3 m × 東西 2.35 m の隅丸方形を呈する小規模な壧穴建物跡である。主軸はほぼ真北を向く。壁高は約 35cm ある。カマドは建物の南東隅に設けられている。遺物は建物の南東に集中して分布しており、カマド周辺ほど多い傾向がある。カマド本体は袖石と天井石が遺存しているが、部分的に崩落している。カマド内には小型甕(10)が、カマドに向かって右側には灰釉陶器壺の底部(11)が開口部を突っ込む形で残置されていた。



SI16 蔵化材検出状況



SI16 カマド遺物出土状況



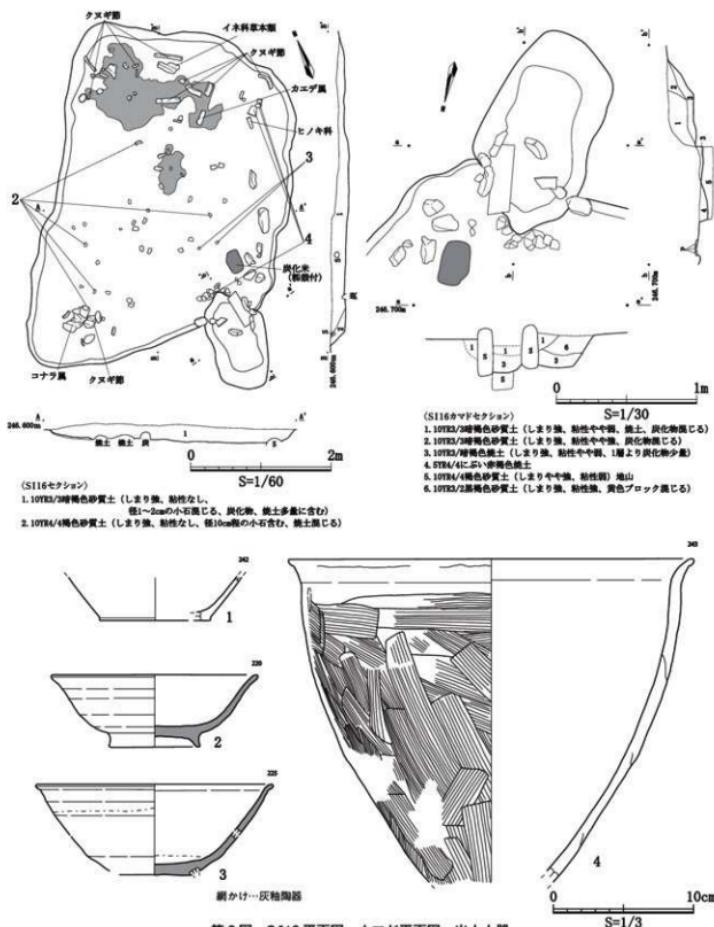
SI33 完壠状況



SI33 遺物出土状況

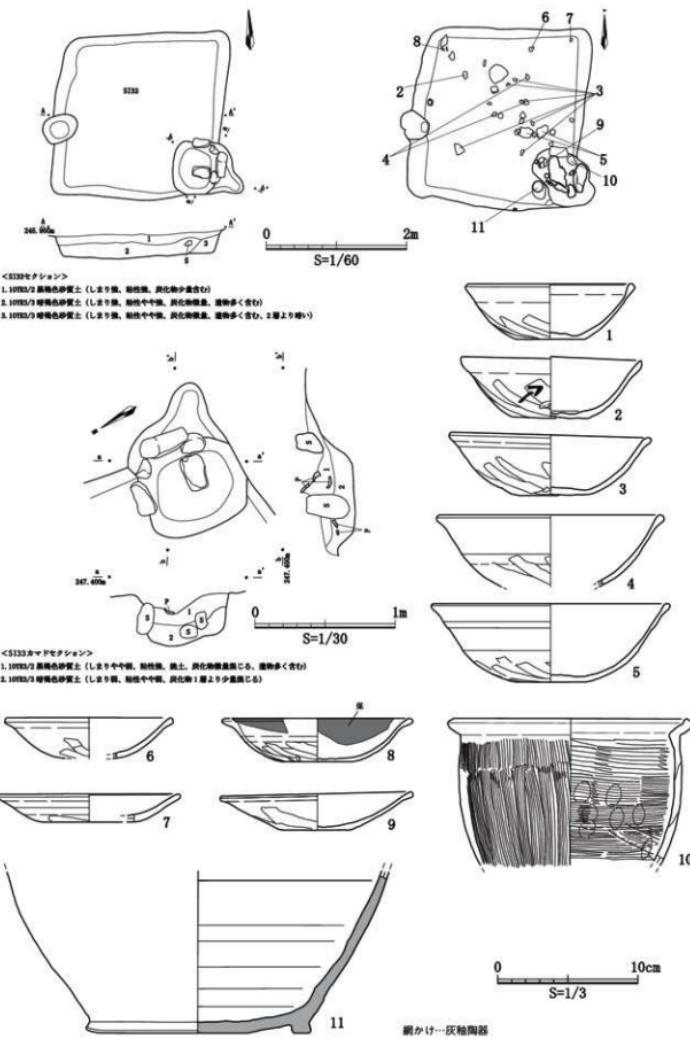


SI33 カマド灰釉陶器甕底部出土状況



第8図 SI16平面図、カマド平面図、出土土器

出土遺物を概観する。1～5は土師器壊。6～9は土師器皿。いずれも口縁端部は玉縁状を呈し、体部下半は斜交方向に手持ちヘラケズリを施す。2は体部に「刀」の墨書きがある。土師器壊には、寸法により大小2種類の規格が認められる。10は小型甕。外面はタテハケ、内面はヨコハケと粘土帯部分に指頭圧痕がみられる。11は灰軸陶器底底部。出土土器は甲斐型VI期に比定される。



第9図 S133 平面図、遺物分布図、カマド平面図、出土土器

(5) 堪穴建物跡 SI36

堪穴建物跡 SI36 は J・K-21 区に位置し、南北 4.0 m × 東西 3.9 m の隅丸方形の平面プランを呈する。主軸はほぼ真北を向く。壁高は残存約 15cm ある。建物跡の南西隅は砂礫層により削平されており、平面プランが明瞭ではない。カマドは東壁のやや南寄りに構築されており、天井石は無く抽石が明瞭に残存している。カマド内には支柱石が原位置を留めている。カマド内土層は、1 ~ 4 層が下凸上に堆積しているようすが見て取れる。1 層はカマド構築材かもしれない。2・3 層は煙道内堆積土と思われる。

カマド周辺では、多量の土器が散在している。カマド内には土師器壺の破片が多く出土し、カマドの周囲では土師器壺もしくは土師器皿が多い。特にカマド北側では土師器壺及び皿が残置されているようすが認められる。土師器皿（10・13）は重ねて置かれている。その他の壺・皿も正位で配置されており、11 の土器内土壤には、動物骨が混入している。このことから、生活の最中に残置されたものがそのまま検出したものと考えられる。したがって、SI36 については、災害などの突然的な要因により堪穴建物の廃棄を余儀なくされたと想定される。周辺の堆積土の状況から、河川氾濫によるものと推察する。

出土遺物を概観する。1 ~ 8 は土師器壺。土師器壺は寸法により 2 種類に分類される。1 ~ 6 は口径 11.7cm ~ 13.2cm の小型のタイプで 7・8 は口径 14.7cm ~ 15.4cm の大型のタイプ。9 ~ 16 は土師器皿。土師器壺・皿は、底部ヘラケズリ、体部下半は手持ちによる斜交ヘラケズリにより調整される。口径は 11.2cm ~ 12.4cm で、いずれも同規格品である。口縁部は玉縁状を呈する。17・18 は土師器壺。内面はヨコハケ、外面はタテハケにより調整される。



SI36 完掘状況



SI36 カマド周辺遺物出土状況



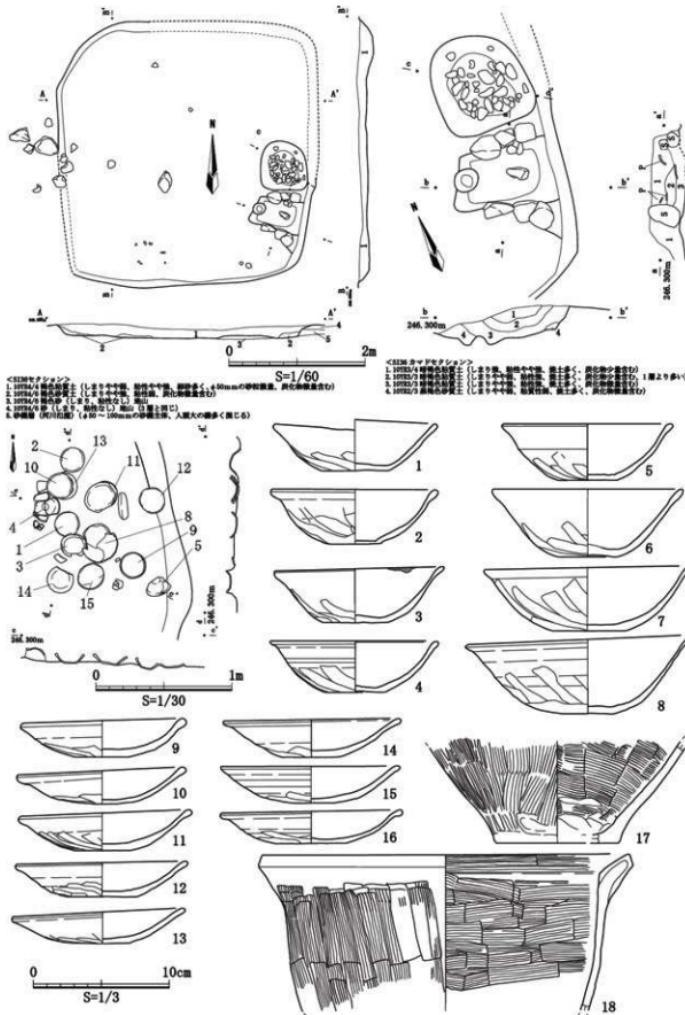
SI36 カマド



SI36 カマド北側の遺物集中



SI36 遺物集中下の貯蔵穴



第10図 S136 平面図、カマド平面図、遺物集中平面図、出土土器

【集落の構成～川跡～】

川跡 NR01 は第 1 次調査区の中央を南北に貫く形で検出した。幅約 5 m、深さ約 0.5 m で、調査区南から北へ流れ、調査区北西隅で西に流れを変える。川底には約 5 cm 以上の大砾が薄く堆積しており、砾層内に遺物が多く混入する。出土遺物には、土師器環・皿・壺等があり、少量の灰釉陶器碗や綠釉陶器皿が含まれる。

出土遺物は川底の砾層は甲斐型土器 VI 期が主体的であり、上層は VII 期～が主体的になる。この傾向から、NR01 の埋没は VII 期段階から始まり、遙くともⅧ 期までに完全に埋没すると推測する。Ⅲ 区では、NR01 の埋没後に構築された堅穴建物跡が存在するため (SI23, 37, 44)、集落が営まれている間に埋没している。また、調査区南東隅方面から北西方面に流入する氾濫による砂砾層（第 5 図網掛け部分）は、Ⅲ 区中央部の壁面断面より NR01 に流入していることから、集落經營中に河川氾濫による被災して NR01 に土砂が流入したことが埋没を許容した要因かもしれない。なお、Ⅲ 区壁面にみられる砾層内からも土器が出土していることから、上部において遺構を巻き込んだ可能性も指摘できる。



NR01 (I 区) 完掘状況



NR01 (I 区) 土層断面図 (I 区西壁)



NR01 (III 区) 瓦砾流入状況 (III 区中央南壁)



NR01 (I 区) 出土遺物集合



NR01 (III 区) 土師器環出土状況



NR01 (I 区) 緑釉陶器皿出土状況

【集落の構成～大溝～】

大溝 SD4004 は、調査区の南東隅において検出した幅約 4 m、深さ約 2 m の V 字状を呈している。土層断面を観察すると、底面付近には、グライ化したシルト層が堆積し、その上部には人頭大の礫が西岸から流れ込むように堆積している。東岸付近には礫の堆積が認められないことや、礫を取り巻く基質層に砂礫が含まれないことから、人為的に礫を大溝内に投棄したものと考えられる。また、礫が最下層のシルト層上部で留まっているようすから、大溝底部がある程度埋没した後に、礫の投棄行為が行われたことが指摘できる。また、詳細は本報告に委ねることとするが、第 2 次調査において大溝 SD4004 の対となる同軸の大溝が検出されている。このことから、堅穴建物跡や掘立柱建物跡を検出した居住空間を取り囲むように大溝が巡っていたことがわかっている。ただし、大溝外にも堅穴建物跡が展開することから、大溝の掘削時期、機能については検討の余地がある。

大溝の機能を検討することを目的として、堆積土に対して珪藻分析を実施した。分析の結果、溝内に流水が認められる時期は存在するものの、やや淀むような環境が長期間継続していたことが指摘されている。また、令和元年度に実施した新町前遺跡（第 2 次）発掘調査において、（株）古生態研究所の辻本裕也氏にご教示いただいた成果では、「水門条件の変化に伴う湿润化により居住域は廃絶した」とも指摘されている。SD4004 底付近から 13 世紀代の遺物が出土しており、大溝が機能し、埋没を開始する時期は居住域の終焉期に該当する。このことから、湿润化に対する居住空間の水抜きを目的とした大溝の可能性があり、大溝の埋没とともに居住域の廃絶が進んでいったと考えられる。



SD4004 完掘状況



SD4004 土層断面

【集落の構成～掘立柱建物跡 SB01 ～】

掘立柱建物跡 SB01 は、調査区南西部に位置する 2 間 × 5 間の総柱の掘立柱建物である。それぞれの柱穴底部には礎盤石が配されている。柱穴は、堅穴建物跡を検出した検出面よりも上面、第 1 面の水田床土を形成する土層直下から掘り込まれていることが壁面の土層断面から観察することができ、堅穴建物跡の時期からやや遅れて構築されたものと考えられる。



SB01 完掘状況

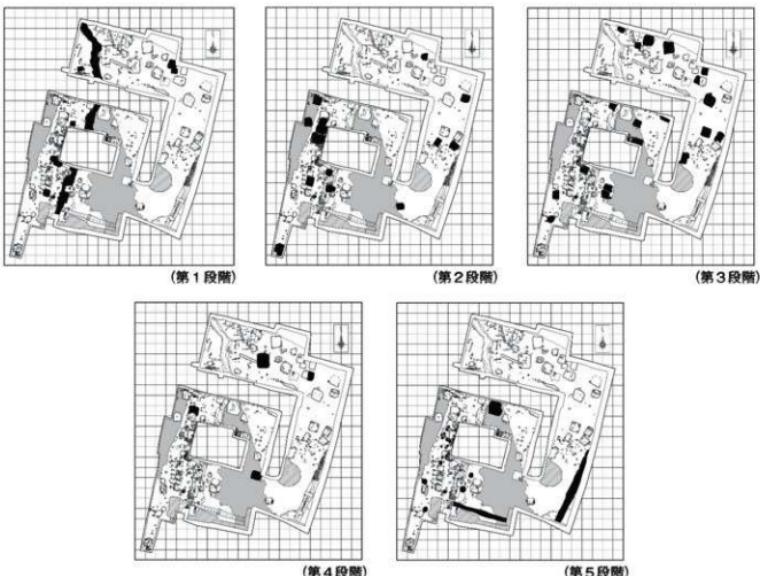


SB01 柱穴の土層断面

4.まとめ

(1) 新町前遺跡の土地利用の変遷

第1次調査では、甲斐型土器VI～中世にかけての遺構を確認している。当該時期の遺構について、変遷を検討し、土地利用の変化をみてみる。集落形成期（第1段階）は甲斐型土器VI期に帰属する遺物を主体とする遺構群である。川跡 NR01 をはじめ、川跡の左岸を中心に竪穴建物が点在する。竪穴建物跡は北東方向に傾く傾向にあるが、SI03のみやや西に傾く。この傾向について遺構配置を見渡すと SI03 は NR01 がやや西に傾く場所にあり、SI03 も同様の傾きを示す。したがって、当該期の建物は NR01 に建物配置が迎合していることが指摘できる。第2段階は甲斐型土器VII期に帰属する遺物を主体とする遺構群である。竪穴建物跡の数が増加する傾向が認められる。建物の軸は、前段階を踏襲している。NR01 には砂礫層が流入しているようすが見て取れ、当該期に NR01 の埋没跡に竪穴建物跡を構築するものもある。第3段階は集落の最盛期にあり、竪穴建物跡の数、密度が最大になる。第2段階～第3段階にかけての竪穴建物跡には鍛冶炉を持つものもある。第1次調査では、鉄滓や櫛羽口、溶融土器などの小鍛冶に関わる遺物が数多く出土しているほか、刀子、鉄鎌などの鉄製品の出土が認められることから、当該期の経済基盤として鍛冶が行われていた可能性もあるだろう。第4段階は甲斐型土器VIII期に帰属する遺構群である。竪穴建物跡の軒数は極端に減少する傾向がある。第5段階は甲斐型土器X期以降の遺構群である。当該期に帰属する明確な竪穴建物跡は SI30 の1軒のみである。その他の遺構では、掘立柱建物跡 SB01 や大溝 SD4004 が当段階に当たる。前述したことおり、居住空間としての環境が保たれなくなり、居住空間を囲繞する大溝を掘削して土地の水抜きを試みた時期になる。大溝の埋没とともに当該土地の地下水位の上昇により、居住空間としての利用を断念し、水田や畑といった生産域への土地利用へと変遷していく。



第11図 土地利用の変遷

(2) 市川大門地域の空間構成

新町前遺跡を取り巻く地形を鑑みると、当該地は必ずしも居住空間としての利用に適した土地ではないことがわかる。北約2kmには笛吹川と芦川の合流地点がある扇状地の端部に位置しており、芦川の流路が頻繁に移動することにより、水害の被害が頻発したことは想像に易い。また、発掘調査の成果からも、第1面では手指様に幾筋も広がる河川氾濫流路が検出したほか、水田用水路を破壊するなどの営力を持つ水害に被災した状況も見て取れる。一方で、周辺の地形を見渡すと扇状地縁辺部には自然堤防や台地があり、集落を形成するのに適した土地が無いわけではなく、周知の埋蔵文化財包蔵地は扇状地縁辺部に集中している。では、なぜこのような土地に居住城を展開しようとしたのだろうか。

新町前遺跡が所在する芦川の扇状地は、東西約3km×南北約2.5kmの小規模な地形単位である。より巨視的に見てみると甲府盆地縁辺部の南東隅に当たり、富士川が盆地を流出する地点を望む地域である。また、中道往還を上九一色村で分岐して芦川沿いを下る道が甲府盆地に出ると市川大門に出る。市川大門地城はこうした交通路の要衝に当たる地域にある。また一方で微視的に見ると台地上には天台宗の甲斐国の大本山である平塙寺や延喜式内社の一つである弓削神社、時代は下るが12世紀前半に源義清が配流された伝平塙館などの拠点的な施設が古擅している。また、扇状地西端部に南北に展開する自然堤防上には、現在のところ中世以前の遺跡は知られていないが近世には市川陣屋を擁する市川大門村が展開しており、当該期の居住空間利用として優先度が高いように考えられる。これらの周辺環境を鑑みると、新町前遺跡の古代集落が展開した地域においても、台地上や自然堤防上には拠点的施設を構える有力者層が点在しており、その有力者層を支える一般層は、居住城を扇状地の中でも低地地域に選ばざるを得なかった可能性が高く扇状地全体として階層的な土地利用がなされていたことが指摘できよう。特に今回の発掘調査で見つかった堅穴建物跡の中には、礫層の地山を掘り込んで構築されたものも存在しており、明らかに居住空間としての適合度は低いと言える中で、(他に居住に適していると思われる土地が存在するのにも関わらず)数百年に渡って集落が形成されているのである。このことはつまり、巨視的に見た甲斐国(甲府盆地)の要衝という好立地と微視的に見て扇状地という狭小地で土地利用を制限された矛盾が一般集落の低地選地というかたちで表れていると考えられる。



第12図 市川大門地域の空間構成



礫層上につくられた堅穴建物跡 (SI25)



礫層上につくられた堅穴建物跡 (SI30)

調査組織

調査主体 山梨県教育委員会（平成30年度）
 調査期間 山梨県埋蔵文化財センター
 調査担当者 御山亮済（主任・文化財主事）、數野優（主任・文化財主事）、岩永祐貴（文化財主事）
 作業員 〔発掘調査〕浅野修、穴山公、穴山清、雨宮信次、新谷博朋、飯室恵子、今村美和子
 大森博、岡田保彦、勝村溪太、河西元彦、川住たまみ、川崎貴彦、河西町男、木内雅人
 鹿田信一、熊谷文彦、小池幹子、小泉昌彦、小林英樹、小林森雄、坂本國廣、阪本健治
 清水治重、田丸進、近山辰男、鶴田晴夫、直井光江、中込柳、難波礼、新田史男
 萩原森詞、長谷部久樹、弘内茂明、藤原正大、松木泰徳、水上喜正、宮城良男
 武藤駿平、村松夏彦、望月晶、山本顕伸、山本茂樹、山本修二、筒本公幸、米山文徳
 渡辺三男、和田豊
 〔整理作業〕小池美保子、流石利枝子、中根修二、原光彦、藤原由紀子、石坂恵理
 猪股順子、長田良二、小松千賀子、齊藤律子、土井みさほ、新津多恵
 協力機関 市川三郷町役場

報告書抄録

ふりがな	しんまちまえいせき（だいいじじ）がいはう					
書名	新町前遺跡（第1次）概報					
副題	県南地域単位制・総合制高校建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査					
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書					
シリーズ番号	第330集					
著者名	御山亮済					
発行者	山梨県教育委員会・山梨県観光文化部					
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター					
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL: 055-266-3016					
発行年月日	令和3(2021)年3月19日					
ふりがな 所取遺跡	所在地	コード	北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積m ²
しんまちまえいせき 新町前遺跡 (第1次)	市町村 三郎町市川大門1733-2	遺跡番号			2018/4/26 ～ 2019/2/4	11,400m ²
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
新町前遺跡	水田跡・畠跡 集落跡	平安時代 中世	〔平安時代〕 竪立柱建物跡1棟 堅穴建物跡50軒 ピット、土坑300基 以上、溝12条 〔中世〕 水田跡15面、畠 跡1面、水路1条	土師器、須恵器 灰釉陶器、青白磁 土製品、石製品鉄 製品、銅製品、古 錢、馬齒	平安時代の土師器には墨書き土器を含む。 平安時代の鐵製品には、輪羽口、鉄洋、被熱 カワラケなどの鍛冶関連遺物を含む。	
要約	新町前遺跡は、市川大門地域を流れる芦川が形成した扇状地上に平安時代～中世にかけて営まれた集落跡・田畠跡の遺跡である。本事業の施工に先立つ試掘調査により、新たに発見した遺跡であり、分厚い砂礫層により埋没した遺跡である。発掘調査では、これまで河川敷と思われていた土地履歴に反して、平安時代～中世の約500年間にわたる濃厚な人の生活・活動の痕跡を見出した。生活面に残された河川氾濫の痕跡から、災害が多い地区であったと考えられる。扇状地縁辺部にある台地上に展開する寺社と低地に展開する集落の巨視的に見た地域の土地利用と村落の構造に一石を投じる成果となり、市川庄や源義清配流、平塙寺、弓削神社などの古代甲斐国の大拠点的な施設を包括する市川大門地域の歴史を紐解く重要な要素を見出した。					

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第330集

印 刷 日 令和3(2021)年 3月19日
発 行 日 令和3(2021)年 3月19日

新町前遺跡（第1次）概報

発 行 山梨県教育委員会
山梨県観光文化部
編 集 山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508
山梨県甲府市下曾根町923
TEL:055-266-3016
印 刷 青柳印刷株式会社